

時代の「空気」～エピソードの積み重ねから見えてくるもの

福田和也氏と云へば、近代フランス文学の研究者として出発したが、今や当初の専門を超えて旺盛な評論活動を展開してゐる。昭和史に関しても、十年以上前に『魂の昭和史』（PHP）といふ著作を上梓するなど以前から関心を寄せてきたやうだ。

そんな福田氏が、数年前から『文藝春秋』誌上で『昭和天皇』といふ連載を開始し、昭和天皇の御生涯を軸に近代日本の歩みを問うてゐる。そして、既に単行本となつた第一部および第二部に引き続き、第三部を刊行した。

本書では、昭和元（一九二六）年十二月二十五日の昭和天皇御踐祚から昭和七（一九三二）年二月九日の小沼正（血盟団員）による井上準之介（前蔵相）暗殺までの五年あまりが取り扱はれてゐる。この時期、金融恐慌によつて銀行が相次いで倒産し、支那での紛争は張作霖爆殺へと発展した。さらには、第一回普通選挙を通じて無産政党が議場に登場する一方で、三月事件や十月事件といった軍部によるクーデターも計画される。後世の我々から見れば激動の日々であるが、福田の云ふやうに「日常は堅固なものであるし、明日が今日とははなはだしく違うわけではない」以上、その変化の重大さには気付にくい。

福田氏は、ポストモダン思想の影響を受けてゐるせいか、歴史を扱ふ場合でも、ある一点へとエピソードを整序するのではなく、様々なエピソードを無造作に投げ出す手法を採用してゐる。「天皇」といふ圧倒的な磁場を有する言葉を排して「彼の人」と表記したのも、そのためだらう（さうしなければ、あらゆるエピソードが「天皇」のもとに収斂するだらう）。結果として、学術論文や伝記とは全く異なる小説にも似た独特の文体が出来上がった。たゞ、読む人によっては、エピソードの散漫な羅列、あるひは自分一人を高みに置いてゐるやうに感ずるかもしれない。

（一般国民だけでなく）昭和天皇までも深く興味を示されたドイツの飛行船「グラーフ・ツェッペリン」号と、その背後にある日独の軍事的提携。あるひは、田中義一と浜口雄幸に対する昭和天皇の御感情と、それに少なからぬ影響を与えた新聞といふ都市大衆メディア。さらには、松下幸之助・西尾末広・佐多稲子・寛克彦・岸信介などを巡る様々なエピソード。これらが絡み合ふ中で、昭和初年代といふ時代の「空気」が浮き彫りになる。

もちろん、そのやうな「空気」を読めない（読まない）人たちも存在した。台湾銀行救済策を検討する枢密院の会議で、天皇の御前にもかかはらず延々と政府を糾弾する枢密顧問官の伊藤巳代治。御皇室に「お世継ぎ」が生まれぬことに苛立ち、宮中幹部に「側室候補」を提示した元宮内大臣の田中光顕。伊藤博文の側近であつた前者、幕末動乱期の生き残りであつた後者。その凄まじいまでの好色ぶりと合はせ、読む者を辟易とさせる。

本書を読みながら感じたのは、世界金融恐慌や「政権交代」といつた大きな変化が起こつたにもかかはらず、日常生活のレベルでは何ら変はつてゐないかのやうな現代日本との共通性である。気付かぬうちに大きくなる歪み。ニヒリズムと大言壮語。私たちは、この「迂り角」を果たして乗り切れるのだらうか。政治的テロルの時代が近づきつゝあるのだらうか、それとも…。